

学生活動サポート助成金とその報告

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / Lifelong Learning and Career Studies

(巻 / Volume)

21

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

143

(終了ページ / End Page)

165

(発行年 / Year)

2024-03

学生活動サポート助成金とその報告

法政大学キャリアデザイン学部学生サポート委員会

「学生活動サポートプログラム」は、キャリアデザイン学部の理念に基づき、キャリアデザイン学およびキャリアデザインの実践を発展させる活動・研究（キャリアデザイン学部の学生が代表者となる団体が行うものに限る）について、その費用の一部に対して助成を行う制度である。対象となる活動の条件は、以下の通りである（2023年度学生活動サポート助成実施要項より）。

- （1）学生主体の活動であること
- （2）法政大学キャリアデザイン学部の外部にある個人や団体等と協働・連携し、社会に貢献する社会的活動であること
- （3）活動の受益者が活動の当事者（団体）に限定されていないこと
- （4）活動の成果を広く社会に公開できるものであること

以下のページでは、2023年度に助成を受けた各団体の実績報告書を掲載しているので、ご参照いただきたい。本プログラムの助成金は、法政大学キャリアデザイン学会から支出されたものである。同学会の運営にご協力いただいている全ての方々に、この場を借りて改めてお礼申し上げます。

（学生サポート委員長 安田節之）

メディアリテラシーを用いたSDGs推進活動

—異文化交流と学習支援におけるメディアリテラシー—

代表者：WAN QIXIAN

1 連携した学外の個人・団体名

泰日工業大学
特定非営利活動法人地球対話ラボ
いわきユネスコ協会
いわき湯本温泉古滝屋
墨田区えんぴつの会

2 実施概要

本報告書では、法政大学坂本ゼミの学生活動サポート助成を通して行った活動の実績について報告する。今年度は、バンコク研修、世界報道の自由デーティーチイン、福島研修、そして墨田区自主夜間中学校「えんぴつの会」の学習支援活動の4つのプロジェクトに取り組んだ。以下、各活動について詳細に紹介する。

(1) コンテンツ制作を通じた異文化交流と学習支援

①バンコク研修

今年度のバンコク研修は、8月25日から28日までの間で開催し、泰日工業大学との異文化交流を目的として実施した。現地での学生同士の交流を通ることで、文化や言語の違いを理解し、国際感覚を養うことを目指した。研修では、バンコクの豊かな文化や歴史に触れるため、様々な観光地を訪れた。

まず、バンコクを象徴するお寺として有名なワット・アルンなどを訪れ、仏教の精神やタイの伝統文化に触れた。お寺の荘厳

な建築や静寂な雰囲気は、ゼミ生たちに心静かに自己の内面を探る機会を提供した。

次に、バンコクの活気あふれる市場文化も体験した。特に、百年市場では、独特な食物や伝統的な工芸品を購入しながら、地元の人々と交流した。食文化の豊かさや歴史感ある環境は、タイの日常生活に触れる貴重な機会となった。

さらに、当地の大学生と共に動画制作にも取り組んだ。泰日工業大学の学生と共に、バンコクの大学キャンパスを訪れ、共同作業で文化や言語の違いを超えて交流し、新たな表現の可能性を模索する良い機会となった。

彼らとの交流を通じて、日本とタイの若者のキャリア観や考え方の違いを理解し、国際社会でのコミュニケーション能力を向上させ、異文化理解を深めることができた。その言語や文化の壁を超えた共同作業の経験は、参加者たちにとって貴重な学びの場となった。

図1 泰日工業大学の学生が映像を編集している様子



②福島研修

11月13日～14日の福島県での活動では、被災地訪問と学習支援を行った。秋学期の活動にゼミの新生が多いため、福島について知ることがすくなく、去年とは異なり、被災地訪問に重点を置くことにした。富岡駅周辺、請戸小学生や原子力災害考証館などを訪れ、現地の人々と交流し、復興の課題や可能性について学んだ。

また、東日本大震災の被害を受けた四倉とスマトラ島沖地震の被害を受けたアチェの小学校を動画で繋ぐという活動を行った。小学生たちは自分の思いや生活を記録し、動画を通して互いの気持ちをシェアすることで、異文化交流を実現した。さらに、訪問先での撮影を通じて、支援活動を記録し、映像作品として発信することで、被災地の声を広く社会に伝えることを目指した。

図2 小学生たちが映像内容を考案している様子



③墨田区自主夜間中学校「えんぴつの会」訪問

「えんぴつの会」の学習支援活動では、まず、えんぴつの会スタッフの庄司匠氏と事前にメールでのやり取りした後、10月27日にゼミの新生向けの説明会を開催することを決めた。説明会では、夜間中学校の歴史や必要性、具体的な活動内容などについて新生たちに紹介し、夜間中学校がどのような活動をしているかについてより具体的な印象を残った。

また、学習支援のテーマを決定するために、スタッフ会議に参加した。過去の活動の反省や今後の方針について議論し、夜間中学校の学習者たちがより効果的に支援されるための計画を練った。最終的に、「世間にもっと夜間中学校のことを知ってほしい」というテーマにした。

そのゆえ、12月7日、11日でインタビュー取材を行い、「えんぴつの会」の紹介を含め、まだ夜間中学校のことを知らない学生たちに向けた紹介動画を制作することになった。学習者との対面交流を通じて、相互理解や共同作業の経験を促進すると同時に、学生自身も教育や社会貢献に対する理解を深める機会となった。

(2) メディアリテラシー教育

①世界報道の自由デーティーチン

12月9日に「マスメディアの持つべき姿勢とは」というテーマでオンライン開催されたデーティーチンでは、長井暁氏をゲスト講師に迎え、NHKとジャニーズ事務所問題についての講演を行った。

ジャニーズ事務所の故ジャニー喜多川氏が、事務所の所属タレントに対し性加害を繰り返していたとされる問題を提起し、このことについて、これまでテレビで報じてこなかったマスメディアの姿勢に対しての世間の疑問や批判に注目した。日本人全員が情報を受け取り、発信できる時代(1億総メディア)に必要なメディアリテラシーやそれに関係する要素を学ぶ機会としてテーマを設定した。その後、参加者と共に質問や意見交換を行い、メディアの役割や責任について認識する機会となった。

3 結果・意義・所見

(1) ゼミ活動の所見・その感想と意義

①全体の振り返り

今年度の実施したプロジェクトは、多岐にわたる成果を挙げた。バンコク研修では異文化交流を通じた国際感覚の向上、世界報道の自由データーチンではメディア倫理に関する深い議論の機会を提供し、地球対話ラボとの協働活動では被災地支援を通じた社会貢献意識の育成、そして墨田区自主夜間中学校「えんぴつの会」の学習支援活動では地域との絆を深める機会を提供した。

a) メディアに関する思考

世界報道の自由データーチンに関し、性犯罪の温床となったのは、マスメディアの沈黙であったように思った。テーマの「マスメディアの持つべき姿勢」とは報道機関として事実を公明正大に貴賤なく発信することであると考えますが、報道機関も人間組織である以上同じような間違いが（ジャーナイズ以外でも）繰り返さないとはいえない。学生運動というワードがデーターチンの場でいくらか交わされた。市民としてそうした報道機関を監視し喚起をする力は、人権を重視するようになった現代だからこそ求められていると考えられる。そのために、情報を受け取り発信するためのメディアリテラシー教育を考える必要があるのではないかと思った。

今回のデーターチンを受け、福島県での体験も然り、第一部での長井暁氏のお話にも当てはまるが、「分からないもの、知らないもの」を知ろうとする姿勢の大切さを実感する会だった。中々今の若者にはタイムパフォーマンスやコストパフォーマンス等の観点から、素早く情報を得ようとする傾向にあるが、だからこそ実際に現場に向かうこと、経験することといった「しっかりと情報と向き合う」ことが今の若者に必要であることも感じた。又、新たな活動や行動に繋がるきっかけとなる点に関しては、

若者にとって大きなメリットとも思えた。

b) 映像制作による学習支援

ゼミで行われた活動は常に新しい体験を与える。特に、バンコク研修で泰日工業大学の学生たちと三日間だけ活動しているが、その文化と環境から相当衝撃を受けた。例えば、2、3歳の男の子が平気で店の中に丸裸でブラブラ歩いている景色を見る際に、それが「文化の違いだな」と大変不思議に感じた。

卒業を控えたタイの4年生たちも同じように、将来に対して不安と期待に満ちている。彼らはそれを動画にして発信した。言葉が通じなくても、簡単な日本語や撮影した映像で己の考えやキャリア観を確かに理解した。もしかしたら、四倉の小学生から映像を受け取った際のアチェの子どもたちも、同じ気持ちを感じたかもしれない。ともすれば、その「コンテンツの伝達」が異文化交流における映像制作の意味だと思った。

一方、えんぴつの会におけるボランティア活動を通して、自主夜間中学の役割や必要性、現在の課題が浮き彫りにされた。その中で、認知度の不足が課題として浮上した。こうした課題に対処するために、映像制作を通じて取り組みが行われた。

インタビューやドキュメンタリー動画制作に携わったことは、自分たちにとって貴重な経験であった。個別にインタビューを行いながら、夜間中学校の学習者や教職員の声を聞くことで、彼らの生活の教具と学びの環境に対してより理解するようになった。特に、彼らが日中の活動と夜間中学校の学びを両立させる姿勢には、感動を覚えた。

また、映像の制作過程では、映像を経て夜間中学校の魅力や重要性を伝えることに挑戦した。その過程で、映像の表現力と言

業を超越した「伝える力」の重要性を再認識し、異なる視点から学びやコミュニケーションの力を高めることができたことを実感した。今後も、このような活動を通じて、社会貢献や人とのつながりを大切に、成長していきたいと思う。

②まとめ

以上のことから、映像制作は広報手段としてのみならず、異文化交流やメディアリテラシーの体験的学習の促進にも寄与し、社会的意義が高いことが示唆される。

それは単なる学習支援に留まらず、社会的な結びつきと共に、教育の普及という大きな目標に向けた一歩として位置付けられる。私たちが行った取り組みは、夜間中学校やユネスコスクールに対する支援だけでなく、地域社会との連携や啓発活動を通じて、より広範な影響を生むことができた。

新入生に夜間中学校の存在や必要性を理解させることで、教育の機会均等への認識が広がった。

また、制作した動画が地域や学校イベントで上映されることで、夜間中学校の活動がより多くの人々に知られることとなり、社会全体に教育の重要性や、その多様なニーズに対する理解が深まった。このような活動を介し、教育が持つ力をより広く社会に伝えることができ、それが地域社会の発展や個々の成長に貢献していることを実感した。

このように、校外実習やボランティア活動を通じて得られた成果は、地域の復興や社会的課題への取り組みにおいて重要な示唆を与えるものであり、これらの取り組みは地域社会や社会全体の発展に助成するとともに、学生自身の成長と社会貢献意識の向上にも大きく寄与すると言える。

阿智村×法政 ランタンナイト

—日本一の星空 浪合パーク スペシャルイベント—

代表者：玉置将那

1 連携した学外の個人・団体名

株式会社阿智昼神観光局 松下様、湯元ホテル阿智川 熊谷様、日長庵 桂月 小島様、阿智村産業振興公社。

2 実施概要

(1) 企画概要

①企画の動機・背景

阿智村は昭和48年に、旧国鉄トンネル調査中に温泉が発見され、温泉郷としての開発が行なわれ、次々と旅館が増加した。一時は観光客で溢れていたが、温泉だけでは集客ができず、客足が遠のいていた。そこで株式会社阿智昼神観光局は観光客増加のためにJCB協力のもと魅を探していると2011年に日本一星空が綺麗という情報があった。それを期に星空×温泉で阿智村は大成功し、年に120万人の人が訪れる一大観光地となった。しかし、時代が進み、客足も徐々に遠退いていた。

1人のゼミ生が以前に阿智村へ来訪しており、そこで日朝庵桂月の旅館を利用した。そこで日朝庵桂月代表の小島さんとお話をする機会があり、そこで何か温泉と星以外に魅力がないか探しているというお話があった。我々はこの課題を解決、協力したいと思い、こちらからプロジェクトをオフアードした。小島さんに阿智昼神観光局の事業推進長の松下さんにご連絡していただいた。今回阿智村からの新しい魅力を若者視点で作ってほしいという要望と共に、学

生サイドにも実践的な活動ができるフィールドを求めおり、双方のニーズがマッチしたことで当該プロジェクトを実施するに至った。

調査を進め、我々は財政に注目した。ここでは観光などに使う商工費に費やすお金が8.3%と他の地域よりも観光などに割くお金が多いことが明らかになった。また、収入の多くも観光客からの利益が他の観光地と比べ、比較的多かった。観光の収支が多いのに対し、支出の多くは民生費に充てられていた。そのためこの村の存続のためには観光での客の単価UPか観光客の増加のどちらかが必要であると考えた。そこで松下さんに聞き込みを行うと、周りに便利な公共交通機関がないため、農業や伝統工芸などが多く残っているのだが、うまく観光に協力してくれない現状があると伺った。村全体の観光への取り組みが必要と考え、その中でも農業を観光に引き込むことが阿智村の観光地としての存続には必要であるという仮説を立てた。

事前の聞き取り調査の結果、我々のこの仮説は阿智村の存続のために必要な要素であり、阿智村の次なる魅力になる可能性があるかと立証された。

今回もコラボの目的としてコラボ先の温泉と星以外の新たな魅力を作りたい、農業を観光に取り込み、村全体での観光地作りをしたいという要望と、我々の実践的な活動をし、学びにつなげるということを目的とし、今回のプロジェクトを進めていくこととなった。

② 企画の趣旨

阿智村の収入を増やし、阿智村の観光を軸とした存続を目的にプロジェクトを行なった。

1. 阿智村の訪れる観光客の単価UPにつながるイベントの実施（法政ストアの物販イベント）

プロジェクト実施期間中に阿智村を訪れた光客に対して、阿智村には星と温泉だけではなく、農業も盛んだということアピールすると同時に農業を生業とする方々の観光への意識変化のためのイベントを開催する。

その目的達成の手段として、阿智村の観光地としての存続のため、我々ができる観光客の単価UPのために、法政ブランドを利用して物販イベントを実施する。

2. 今回の法政ストアの単価UPのための集客イベント（ランタンナイト）

今回の阿智村の課題である温泉と星の次の魅力発見と法政ストアへの集客を目的とした目玉イベントを開催した。星空ナイトツアーを主とした阿智村では観光客の満足度において天候に左右されることが多くあった。そこでその代替にもなりうるランタンイベントを行い、悪天候になってしまった場合にも満足度を維持するため、街頭ひとつない星空ナイトツアー開催場所においてランタンを点灯するイベントを開催する。

3. 今後新たに白馬村へ訪れる観光客を増やすため観光客へのアンケート調査

今後の阿智村の新たな魅力発見とさらなる繁栄に伴って、何が一番阿智村で良かったかを調査する目的でアンケート調査を実施する。どんな人がどんな理由を持って訪れるのかを把握することで、今回コラボした株式会社阿智屋神観光局を始めとするその他企業がより多くの観光客を呼び込むた

めの事業発展につなげることができると考える。

(2) 活動内容

① 実施時期

10月	前半ゼミ合宿の日程調整開始
10月	後半合宿日程決定
11月	プロジェクト始動
11月	第一回阿智村日朝庵桂月小島さん、株式会社阿智屋神観光局松下さんミーティング開催
12月	班決定
1月	各班でのプロジェクト進行
2月2～4	ゼミ合宿開催

② 実施内容

(1) 法政ストア実施詳細

阿智村の財政の大きな一部に貢献している観光業においてお客様が減ることは村の収入が減ることと同じことを指していた。観光客の集客はアクセスが悪く、路面凍結する恐れがあり、私たちの力と短いプロジェクト準備期間では難しいと判断した。そこでその日阿智村に観光に来ているお客様の単価UPを目指した。そこでお客様が多く集まる阿智村の一大イベントである星空ナイトツアーでのグッズ販売を行なった。このイベントの実施にあたって、ターゲットへの狙いを二つ定めた。

1. 星と温泉だけではないというイメージを持たせるための農作物販売。

農作物の中で1番の名産であるリンゴを使ったリンゴシードルの販売。

2. 星空をより楽しんでもらうための星空グッズの販売促進。

今回、来訪者の売り上げのデータが先方になかったため、どのくらい法政ストアに単価UP効果があるのかを調査するのを目的とする。

農業を観光にという課題解決のためにも以前から阿智昼神観光局と交流がある阿智村産業振興公社の力を借りた。

また、当日の星空ナイトツアーの予約が可能とのこともあり、集客のための施策として、イベント告知用のチラシとともに節分ということもあり豆を配った。

(2) 阿智村×法政 ランタンナイト実施詳細
観光客の単価UPのために集客を目的としたイベントを開催した。ランタンを選んだ理由としては2点あります。

- ① 悪天候により星を見ることができなかった際の代替となることができる
- ② ランタンの経済効果がある

以上の点からランタンは集客のために有効だと考え、当日法政ストアに訪れ、単価をUPさせる母数を増やす目的として実施。

(3) アンケート実施内容

質問内容は以下の通りである。

- ・ イベントにはどのくらい満足されましたか？
- ・ 性別
- ・ 年齢
- ・ お住まいの都道府県
〈阿智村についての質問〉
- ・ 阿智村への交通手段
- ・ 阿智村に来た目的はなんですか？
- ・ 具体的な目的はなんですか？
- ・ 何を見て『浪合パーク』に参加しましたか？
- ・ 何を見て『阿智ベース』に参加しましたか？
- ・ 初めて阿智村に来訪した方へ、また阿智村に行きたいと思いませんか？
- ・ 複数回阿智村に来訪する方へ、このようなイベントを毎年開いてほしいと思いませんか？
- ・ 全体として何が一番良かったですか？
- ・ 阿智村で食品やお土産やイベントで使用し

た金額は？

- ・ 阿智村での観光について、こんなあったらいいなどありましたら、ご意見お願いします。

3 結果・意義・所見

①結果

(1) 法政ストアの売り上げの結果
今回の法政ストアの売上内訳は
阿智村産業振興公社の農作物売上：

	9500円
法政グッズ売上：	4630円
星空グッズ：	2287円
合計：	16417円

以上を売り上げることができた。

普段は販売していないため、売り上げ比較ができませんが、今回法政ストアを開いた結果として客単価UPという目的を達成することができた。

(2) ランタンナイト

来場者数は134名であった。普段の利用者数が100人程度というところから比較すると今回ランタンイベントを開催したことで集客することができた。当日は悪天候であり、星空が見えなかった。お客様からは星は見えなかったけど、ランタンは綺麗だったという声を聞くことができた。

②意義

(1) 大学生にとっての意義

地域の観光地としての存続のための客単価UPというテーマに向け、メンバー内で議論を重ねながらイベントの企画・実施を行なった。イベントの企画をするにあたって、ターゲットとなり得る観光客のペルソナ設定を複数行い、それぞれ阿智村に何を求め、何を欲しているのかを分析した。その中で現状白馬村に足りていない部分を見つけ出

し、その課題点を実際に イベントを開催することで解決に近づくことができたという点で、課題発見力や実行力を 身につけることができた。

(2) 阿智村にとっての意義

阿智村でのイベント施策によって、阿智村での客単価を向上させ、村の財政に貢献できた。これをきっかけに、阿智村の農村と観光の共同施策や、単価 UP の施策は効果的であるということを証明することができ、今後阿智村が観光を中心とした村づくりをすることができるきっかけとなった。

これはランタンイベントでも同じことが言える。この施策によって阿智村＝星・温泉というイメージを強調することがで、さ

らなる魅力UPに繋がるきっかけを作ることができた。

また、アンケート調査によって阿智村に訪れる観光客の目的や過ごし方を顕在化できた。この結果を活用することでさらに阿智村を盛り上げていく施策を検討することが可能になると考えている。

③初見

今回私たちは阿智村を訪れている観光客をターゲットとし、①観光客の単価 UP ②集客のためのランタンイベント③アンケート調査を実施した。結果、イベントには134名が集まり、16417円の単価UPすることができ、阿智村の観光地としての存続のためのきっかけ作りに貢献できたと考える。

軽井沢町追分区の活動・魅力発信

—住民参加型イベント開催を通じて—

代表者：小沢理紗

1 連携した学外の個人・団体名

軽井沢町追分区区長 内堀次雄
元軽井沢町追分区元副区長 佐藤寛
軽井沢新聞社軽井沢新聞編集長 島崎純
信濃毎日新聞記者 堀内彩未
軽井沢町役場環境課 小須田愛美

2 実施概要

(1) 企画概要

①企画の動機・背景

長野県北佐久郡軽井沢町追分区は1660年(寛文)のころから繁栄して、1684年(貞享)にはすでに約545メートルの町並みができ、江戸初期である1688年ころには旅籠屋71軒、茶屋18軒、商家28軒を数え、伝統のある宿場町である。しかしその後、近場に大きな宿場があることや、1909年には「信濃追分駅」が誕生したが、それでもなお交通の便が悪いことから、近年では人口も観光客も少なく、長期休暇の際に避暑地として利用する人が多い。一方で、別荘地としては栄えているほうであり、世帯数は軽井沢町の中でも比較的多い。しかし、通年で在住している人や長期間滞在している人でも、追分区の自治会に登録している人数は少なく、自治会主催の各イベントに参加する人数も少ないという状況にある。そこで我々は、地域の自治会への参加率の低さについて、自治会での活動の内容の周知率の低さ、根本的な自治会加入のメリットの少なさが原因なのではないかという仮説を立

てた。

事前の聞き取り調査の結果、我々のこの仮説は自治会への参加率の低さの一因であると立証された。この時点で二つの課題が浮上しているが、我々の取り組みで解決できると見込める部分としては、自治会の活動内容の周知度の低さの改善だと考え、こちらの問題を解決できるようなプロジェクトを行うこととした。

この問題を解決するために都市部で生活をし、かつ若者の視点から見た追分区の地域自体の魅力や地域での取り組みの見直し、時代や季節に沿った新たな施策を検討することが求められた。

また、併せて追分区からの依頼として、追分宿として観光客の集客という点でも取り組みを行いたいというニーズがあったため、追分区内での集客と同時に区外からの集客も視野に入れながらのプロジェクトを実施するに至った。

②企画の趣旨

軽井沢町追分区の自治体の活動を住民に認知してもらう、また、区内外からの来街者の増加を目的にプロジェクトを行った。

1 追分区に滞在している居住者の自治会参加へのきっかけとなるイベントの実施(追分公民館での追分にゆかりのある映画の上演イベント)

プロジェクト実施期間に追分区に滞在している区民、もしくは区外からの来訪者に対し、区としてのイベントの開催を広範囲

での広報活動で認知してもらうため、また、追分区の魅力のひとつである追分区の歴史や追分区にゆかりのある著名人について知ってもらい、追分区の魅力を区内外の来訪者に知ってもらい、来訪への意義を高めるようなイベントを企画・実行した。(企画段階では、追分区にある伝統的な神社である浅間神社での屋外実施を企画していたのだが、雷雨により急遽予備会場であった追分公民館での開催に変更した。)具体的には、下記の長期休暇間に追分区に避暑のために滞在している若年から中年の家族層、そして追分区に長年在住し、地元であるがために魅力が当たり前になってしまい魅力としてとらえることが無くなってしまった長期在住者をターゲットとし得る、「屋外(屋内)映画上映会」の実施である。

2 ターゲットを若年家族層に絞った自治会、または自治会主催イベントの認知度拡大のためのランタン作成イベント

追分区に滞在している人々の中でも若年層は追分区に定住せずに長期休暇等での滞在にとどまっているため、そもそも自治体の活動内容を認知していない人が多いため、自治会参加へのきっかけとなるような参加型イベント「ランタン作成・点灯イベント」を実施。追分宿の雰囲気再現での魅力再発見、地域活動への参加の実感、また、自治会活動の広報として効果を発揮すると考えた。

(2) 活動内容

①実施時期

6月	プロジェクト始動
6月前半	ゼミ合宿の日程調整開始
6月後半	合宿日程決定
6月最終週	班決定
7月6日	第1回追分区とのミーティング開催
7月中旬	各イベントに向けプロジェクト進行

8月4～6日 ゼミ合宿開催

②実施内容

1 映画上映イベントの実施詳細

追分区はかつて中山道沿いの宿場町としてにぎわっていた。しかし、交通が発達し、宿場町は衰退したのち、避暑地として利用する人が増加し、さらに追分区は軽井沢町の中でも自然に囲まれ、観光客も少ないため、静かで落ち着く街だとして数多くの文豪たちが執筆に集中するために宿を長期間にわたって利用したり、別荘を構えるなどしていたため、数多くの文豪のゆかりの地とされている。しかし、この事実を知っている人は少なく、魅力として伝わっていない。この大きな魅力を多くの人に伝えるため、「伝統のある浅間神社での追分区にゆかりのある映画の上映会」を開催するに至った。このイベントで訴求したい魅力を3点設定した。

①「追分区にゆかりのある文豪がいる」こと

②「追分区でしか感じることでできない自然が多くある」こと

③「追分区の自治会が主催するイベントである」こと

これらの訴求点を伝えるために、追分区の協力を得て、浅間神社での開催とし、追分区で執筆を行っていたといわれる堀辰雄氏の書籍が原作である『風立ちぬ』を上映した。

2 ランタン作成・点灯イベントの実施詳細

このイベントではかつての追分宿の雰囲気再現と来訪者の参加を目的とし、午前10時からランタンの作成イベントを開催(点灯直前まで)した。このイベントでは、若年層の家族をターゲットとし、小学生以下の子どもとその保護者等をメインターゲットとして想定した。会場は追分公民館での開催とし、ゼミ生がある程度まで作成した

ランタンの土台に自由に絵をかいてもらう、色付け、カラーセロファンを貼る等の工程を参加者は行うよう運営した。点灯は完成したランタンの中にキャンドルを入れ、ゼミ生が点灯させる。ランタンは合計約200個を作成し、追分区内の中山道沿いに設置し、約300mにわたり点灯。



図1・2 点灯後のランタン

これらのイベントは共に参加無料である。

これらのイベントを実施するにあたり、集客のために広報活動も行った。

- ・ 追分区内外でのチラシの配布
- ・ 追分区内での回覧板への掲載
- ・ SNSでの発信
- ・ 新聞への掲載（プレスリリースの配信）等

③活動従事者

酒井ゼミ 12期ゼミ生

3 結果・意義・所見

(1) 結果

①映画上映イベント及びランタン作成・点灯イベントでの参加者目標達成

映画上映イベントでの参加者目標は20名、ランタン作成・点灯イベントでの参加者目標は50名であった。実際のイベント参加者

は映画上映イベントでは27名、ランタン作成イベントでは約80名、ランタン点灯後のみの来場者数でも約40名であり、目標を大幅に超え、成功したといえる。また、来場していただいた方には「初めて区がやっているイベントに参加した」という声や「ランタンがとてもきれいで雰囲気合っていた」「風立ちぬにゆかりがあるのは知らなかった」などの声を聴くことができたので、追分区について知ってもらえる好機会にすることができたのではないかと考える。

(2) 意義

a) 大学生にとっての意義

地域を盛り上げ、魅力を再認識してもらうという大きなテーマに対し、メンバー内で議論しながら情報収集や現状分析、イベントの企画・運営などを一連の流れをすべて行った。今回のプロジェクトを企画するにあたり、ターゲット設定やコラボ先のニーズの分析、地域とのマッチ度などを熟考し、課題の解決に向け、十分な準備を行った。実際に企画したイベントを行うことで課題解決に近づけることが可能である等の成功体験や、課題発見力や分析力、実行力を身に付けられた活動であった。

b) 追分区としての意義

追分区での二つのイベントによって、100名を超える区内外からの来街者により、追分区自体の認知度の拡大、追分区が持つ魅力を再認識してもらうこと、さらに、自治会の活動自体も知ってもらうきっかけとすることができた。また、今回ゼミで若者の視点から見た追分区の魅力や今後も実行できるような企画案を今回のイベント以外にも提案したため、追分区からは気づくことのできなかつた魅力の発見もできたのではないかと考える。また、区外での情報発信、広報活動、SNSでの情報発信等を積極的に

行い、区外での広報活動を受け、参加しに来てくださった方も多くいたので、区外に対しての追分区の広報にもなったのではないかと考える。

(3) 初見

今回私たちは追分区内外の滞在者、追分区内の居住者をターゲットとし、①追分区

の自治会が行っている活動の認知のきっかけづくり②追分区の持つ魅力の発信・再認識のきっかけづくりを目的としたイベントを二つ実施した。結果、イベントには合わせて100名を超える参加者が集まり、追分区の情報発信、追分区の自治会・魅力を知ってもらいきっかけづくりに貢献できたと考えられる。

富山県の私立高校におけるキャリアサポートプログラム

—地方での進路選択を支援し、今後の学生生活に対する意識を高めるワークショップ—

代表者：小柴瑛美

1 連携した学外の個人・団体名

学校法人 荒井学園 高岡向陵高等学校

2 実施概要

(1) 企画実施の背景

富山県の私立高岡向陵高等学校（以下、向陵高校）とは、以前から遠藤ゼミとの交流があり、昨年度もオンラインを含め複数回の交流会を実施した。そこでの交流から、向陵高校の生徒たちは、大学生などの外部とのかかわりが少なく、特に県外への大学進学や大学生活のイメージが描きづらいのではないかという印象を持った。また、先生方からは大学受験に対するモチベーションが上がらない生徒が多いということもお聞きした。そこで、昨年度から引き続き同じ生徒（現3年生）との交流会を実施し、私たち大学生との関係を深めていくことで、卒業後の進路や大学生活に対する明確なイメージを持ってもらい、受験勉強に対するモチベーションを向上させていくことができると考えた。さらに、自分の思い描く進路について大学生との会話の中で改めて整理することで、今後の自分のキャリア形成について深く考える機会も提供できると考えたため、交流を継続し本企画を行うことを決めた。

本企画の目的は主に2つある。まず、交流会を通して向陵高校の生徒たちが自分の思い描く進路を明確にすることである。現時点での志望校や、そこに至るまでの気持

ち、行動を大学生に説明できるようになることで、ぼんやりと想像していた進路をはっきりと浮かび上がらせることができると考える。目的の2つ目は、大学生との対話やワークを通して実際の大学生活やそれに向けての受験勉強へのイメージを明確にし、モチベーションを上げてもらうということである。交流会の中で私たち大学生とごっくんらんに話す時間を設けたり、動画などのコンテンツを利用して大学生の1日を紹介するなどして、大学生像や生活についてイメージを膨らませることで、勉強への励みにしてほしいと考えた。

この目的を設定した背景には、事前の向陵高校の先生方との打ち合わせがある。企画の対象となる3年生の担任である藤川先生から、受験生になった生徒の現在の様子について「進路は大まかに決まってきたものはっきりと決めきれない、それによって目標やモチベーションができていない」ということを伺った。そこで、まず生徒たちの自分自身が思う進路を明確にし、今後の具体的な行動につなげられるようにすること、そして実際の大学生活に触れてもらい、はっきりとしたイメージを持ってもらうこと、それにより受験勉強に対するモチベーションを高めてもらうことを目指し、全2回の交流会を企画した。

(2) 事前準備

昨年度から継続して向陵高校でのプロジェクトを行うにあたり、本年度も事前に高校の先生方とオンラインでの打ち合わせ

を行った。私たちからは今年度の大まかな活動計画、具体的なワークの内容などを説明し、先生方には現在の生徒の様子や企画に関する要望、交流する場所や頻度について確認を行った。また、生徒たちの声も直接取り入れるため、交流会前にこちらが作成したアンケートに答えてもらったり、毎回の交流会の最後に評価シートや感想を記入してもらったりなどしながら企画を進めていった。

(3) 実施期日

2023年5月20日(土) 対面形式(向陵高校)
2023年7月18日(火) 対面形式(法政大学市ヶ谷キャンパス)

(4) 企画従事者

藤井郷、天野光結、軽部由菜、田村好佑、山口裕暉、朝倉舞、小林なな、小柴瑛美
計8名

(5) 企画内容

①進路の明確化を目指したワーク

本プロジェクトの目的の一つに、生徒たちの現時点での希望進路を明確にすることがある。志望校や、そこに至るまでの気持ち、行動を言語化し整理することで、今後の受験勉強に向けて具体的な目標を立てるなど次の行動に繋がっていくと考え、これを意識して交流会でのワークを企画した。

5月に向陵高校にて行った第1回交流会では、「自分のプロフィール帳を作成しよう」というワークを行った。具体的には、名前や出身、好きなものなどの基本情報以外に、大学へのイメージや大学生活に期待していること、大学選びの軸、不安なことなど進路選択に特化した項目が記入できるワークシートを配布し、それを大学生と一緒に会話しながら埋めていくという内容のワークである。生徒3人、大学生2人の少人数のグ

ループを作り、ワークを行うことで、上手く埋められない(=言語化できない部分)は大学生が生徒から話を引き出したりしながら、一人ひとりの生徒が自分の思い描くキャリアを言葉にできることを意識した。

②大学生生活のイメージを膨らませる企画

本プロジェクト二つ目の目的として、高校生が大学生活や受験勉強へのイメージを明確にし、進学へのモチベーション高めることがある。交流会では、高校生がリラックスした状態で大学生に悩みや相談を打ち明けられる場を設けたほか、「大学」をより身近に感じてもらえるような体験も取り入れた。以下、具体的な取り組みを2点挙げる。

まず、動画コンテンツを活用した大学生の1日の紹介である。授業のある日、空き時間の過ごし方、一人暮らしの様子など、大学生活にまつわる複数のテーマを分担し、1~2分の紹介動画を作成した。映像だけでなく、音声やテキストも交えることで、高校生に伝わりやすく、また楽しんで視聴してもらえるような動画作りを意識した。

そして次に、法政大学でのキャンパスツアーの実施である。高校生を実際に本校へ招き、模擬授業体験や学校案内を行った。リアルな大学生活を体験してもらうことで、これまで伝えてきた魅力や情報を「イメージ」から「リアルな感覚」や「憧れ」へと変換してもらえるような企画作りを意識した。



図1 模擬授業体験を行う様子



図2 学食で大学生と共に昼食をとる様子

3 結果・意義・所見

(1) 本活動の成果と社会的意義

本活動の実施を通して、生徒たちが自分自身の希望進路を言語化し整理することで、受験勉強に向けた次の行動に繋がれることが期待できる。さらに大学進学先のキャリア形成についても考えるきっかけになりうると考えた。また、大学生とのコミュニケーションや、オープンキャンパスなどの企画によって、これまで曖昧であった大学生像や大学生活に対するイメージを膨らませ、今後の学校生活に対するモチベーションを高めることができたと考える。以下では、本企画を実施した結果と社会的な意義について詳しく述べていく。

①進路を明確化する必要性

藤川先生から伺った高校生の現状について、「大まかな進路は決まってきたが、はっきりと決めきれない」ことが挙げられていた。

この課題に対して、穴埋め式シートを活用し、「進路選択の軸」の発見に繋がる自己分析ワークを実施した。具体的な成果として、大学や進路に対する自分自身の考え・行動を1つずつ紙に書き留めていくことで、「なんとなく」の感覚を打ち消し、整理することができたと言える。加えて、各グルー

プの大学生が、高校生の言語化を促すファシリテーションを特に意識したことで、より具体的な言語化を可能にした。さらに、グループ内での会話が活性化したことで、高校生は多様な思考に触れ、他者の意見も取り入れながら、自身の思考を整理することができていたと考える。本企画を通して、現状の意思を見つめ直し、進路に対する考えを明確にすることで、納得した選択へと繋がる機会提供ができた点から、意義があると言える。

②大学生生活のイメージを具体化させる意義

高校生の現状について、上記に加えて「受験の目標やモチベーションができていない」ことも共に挙げられていた。この課題に対しては、キャンパスツアーを実施した。具体的な成果としては、それまで限られた情報の中で高校生が「イメージ」していた大学像を、「リアル」な体感として取り入れてもらえた点である。言葉だけでは伝えきれない大学の雰囲気や規模感まで伝えられたことで、自分が大学へ進学し、そこで生活する様子を、以前よりも明確に思い描けるようになったと考える。延いてはそれが、志望校への憧れの気持ちや受験の目標設定のきっかけにもなったのではないかと考える。後日、担任の藤川先生から、本企画について「生徒たちのモチベーション向上に繋がった」との感謝の言葉を頂くことができた。今回は、交流対象である高校側の計らいもあり成立した企画だったが、受験や大学生活へのポジティブな気持ちを育む企画ができた点から、意義のあるものだったと考える。

富山県の私立高校におけるキャリアサポートプログラム

ーコミュニケーションスキルを高めるワークショップー

代表者：石川大晴

1 連携した学外の個人・団体名

学校法人 荒井学園 高岡向陵高等学校

2 実施概要

(1) 企画実施の背景

富山県の私立高岡向陵高等学校（以下、向陵高校）は、以前からゼミの先輩方との交流があり、紹介を受けた高校である。今後の自分たちのキャリアを形成していくことや、他者のキャリア支援を行っていくうえで、富山という東京近郊とは全く別の環境で暮らす高校生たちとの間に関係をつくり、地方でのキャリア形成について理解を深めることは貴重な経験だと考え、そのこと以上に、自分たちが富山の高校生たちの進路選択の手助けをしたいと考えたため、本プロジェクトを行うことを決めた。向陵高校の先生方からも交流を行ってもよいという許可を頂いたため、以前より交流を続けてきた先輩方から助言を頂きつつ、高校生に対するキャリアサポートプログラムを企画・実施することになった。

先述したように、向陵高校とは昨年度もオンラインを含め複数回の交流会を実施している。現在の高校生は学生生活の中でコロナの影響を受けている世代であり、制限のある学生生活を送ってきたため学校外でのコミュニケーションの経験が乏しい。先生方から、生徒たちは学校外の人との交流の機会が少なくコミュニケーションスキルに課題があるということ、また 大学進学後

のイメージが湧かず生活に不安があるということをお聞きした。そこで私たち大学生と交流を行うことでコミュニケーションスキルの向上につながる機会にすると同時に、大学生活に対する明確なイメージを持ってもらうことで受験勉強に対するモチベーションづくりを最たる目的とし今回のプロジェクトを企画した。

(2) 事前準備

私たちは富山県の高校生との交流が距離の関係で回数の限られたものになることを見据えたうえで、オンラインも含め計4回の交流の一回一回をよりよい機会にする必要があると考えた。

本プロジェクトのメインである高校生との交流の時間をより多く確保するために、向陵高校の先生方との情報交換を積極的に行うことや、事前資料の作成や事前リハーサルを徹底的に行うことで当日の活動の最適化を図った。

(3) 実施期日

2023年12月15日(金)	対面
2024年2月13日(月)	オンライン形式
2024年2月21日(水)	オンライン形式
2024年3月13日(水)	対面

(4) 企画従事者

石川大晴、伊藤太一朗、植松杏奈、大川深、大窪佑柊、坂本開真、塚本彼方、富岡莉音

計8名

(5) 企画内容

① 1年生とのワークショップ

今回のプロジェクトでは1年生と2年生の同時交流になっているため、私たちはそれぞれの学年のニーズに応じた交流会を企画することとした。今回交流した1年生は、担任である薬師先生との話し合いの結果、社会問題をテーマとした簡単な遊びを高校生と共同制作する企画を行った。今回の交流は、都内の大学生と地方の高校生との意見交換やコミュニケーションを主眼に置いており、そのうえで大学生の考え方や活動に触れて、より明確な進路のイメージを獲得することが求められるため、どちらか一方が与えるようなものでなく、あくまでも共同制作という平等な立場での活動になるように意識して行った。

② 県外の大学生とのワーク

本プロジェクトでは大学生が与えるのではなく、協働することでお互いに学びを得ることが最も重要であるため、ワークの進め方や遊びづくりの方針は高校生との対話の中で徐々に決めていった。ともに作っていくものであるがゆえに進捗管理が非常に難しく、高校生との対話の中で良いものを作るといふ意思と物理的な時間制限との間で最も苦心した。

実際の活動では高校生と大学生が均等になるようにグループ分けし、高校生主導で遊びづくりを行っていった。私たちは、一方的な提供になってしまわないように高校生の意見を引き出すことに尽力した。活動前には必ずアイスブレイクを入れるようにし、そのなかでは薬師先生を含む先生方や、生徒、大学生を交えて、高校生が自分の意見を知らない大学生に向かって伝えやすい環境にするよう工夫した。また、活動後に

はアンケートを取り、項目の中に大学生に対する接しやすさや、ワークに対する印象を入れることで、次回以降の交流方法に生かせる環境を作ることも意識した。

③ 2年生とのワークショップ

担任の吉水先生からは、2年生は地元への進学意識が高く県外への進学意識が低い、大学進学後のイメージが湧いていない生徒さんが多いというお話を事前にいただいていた。またコロナの影響を受けている世代であり、学校外でのコミュニケーションの経験が乏しいことから、大学進学後の新たな人間関係に懸念があるという話もいただいていた。交流の際には、大学生を交え4人程度のグループを組みキャリアデザインに関するテーマを元にグループディスカッションを行い、キャリアについて考えてもらうと同時にコミュニケーションの活性化を図った。また高校生が抱える受験勉強の悩みに対して自分たちの経験を語ったり、大学進学後のイメージを持ってもらうために、大学の授業、サークル、バイトなど質問形式で答えたりした。

3 結果・意義・所見

(1) 活動の結果と社会的意義

本活動の意義は、コロナ過で学外での交流が閉鎖的になってしまった高校生に対し、県外の大学生とのコミュニケーションや交流、意見交換を通して、学校外での交流経験を得ることができるという点と、同時に年上の人との意見交換を通じてコミュニケーションスキルを向上させられる点、そして先生よりも身近な大学生と関わることで、自らの進路や将来の姿を描きやすくするという点がある。以下では、本企画を実施した結果と社会的意義、今後の活動に向けての振り返りについて詳しく述べていく。

①交流で生まれた変化

交流の際には高校生が発言しやすい環境をつくるために、活動前には必ずアイスブレイクを入れ、意見を引き出しやすいように心掛けた。先生方から当初聞いていたよりもコミュニケーションスキルの心配はなく、回数を重ねるごとに意見交換が活性化していくのが感じられた。1年生の担任である薬師先生からは、生徒たちの発言が増え、変わった一面を見ることができたという言葉をいただいた。

②県外の大学生がワークショップを行う意義

現在の高校生はコロナの影響を受けている世代であり、制限のある学生生活を送ってきたため学校外でのコミュニケーションの経験が乏しい。そのような状況にある生徒たちにとって、首都圏の大学生との交流というのは非常に新鮮な体験であると考えられる。1年生との交流において、今回はゲームという形であったが、企画から完成まで大学生と一緒に主体的に作り上げることがで

きたという経験は価値のあるものだと考える。先述したように、担任である薬師先生からは、大学生との交流を通して、高校生が自分たちの考えを表現したり、多面的にものを考えたりしている姿を見ることができたという言葉をいただいた。2年生との交流において、先生方よりも年齢の近い大学生の話聞くことで、大学進学後のイメージを膨らませ、受験に対してのモチベーションづくりになったと考える。これらのことから、私たち大学生が企画を行う意義があったとすることができる。

(2) 今後の活動について

今後も、オンライン形式を交えながら2～3か月に一度ほどのペースで継続的に交流を行っていく予定である。交流の際には事前・事後アンケートを行い、生徒たちのニーズに応じた交流を行うことを意識し、向陵高校の生徒のみならず、大学生の視野も広がるようなワークを企画し、今後の活動として展開していきたい。

神奈川県インクルーシブ教育実践校におけるキャリア支援

—他者と楽しく関わり合いながら自分に自信を持つワークショップ—

代表者：高瀬奏

1 連携した学外の個人・団体名

神奈川県立 霧が丘高等学校

2 実施概要

(1) 企画実施の背景及び概要

本企画は神奈川県立霧が丘高等学校（以下、霧が丘高校）の卒業生である多久和がインクルーシブ教育に注力している母校で、大学生として何か関わったり、貢献したりすることができないかと考えたことが発端となって始まった。

本企画では、当該高校において、障害のある、あるいはその傾向のある生徒たちのキャリア支援を目的としてワークショップを行っている。霧が丘高校では共生社会実現を目指したインクルーシブ教育の実践を推進しており、軽度の知的ハンディキャップを抱える生徒が、特別入試を経て、一般の生徒と同じクラスに1,2名ほど在籍する仕組みをとっている。私たちは程度の異なる障害のある（または、その傾向のある）生徒たち各々にとって有意義な活動にすべく取り組んだ。

また、本企画の趣旨はキャリア支援の対象者である霧が丘高校の生徒たち（以下、連携生）が個性を活かすことによって、自分に自信を持ったり、楽しく他者と関わったりすることである。当該生徒たちは、これまでの活動より、自信が低い傾向にあることや、他者理解の困難さ、他者との関わりの不得意さを問題として抱えていること

が分かっている。そのような生徒たちがワークショップを通じて、個性の活用からなる成功体験による自信の獲得や、他者と楽しく関わる経験を得られるよう尽力した。

上記の企画の目的及び趣旨に則ったワークショップとして、親睦を深めるためのゲーム、インクルーシブを意識した誰かのためのコップ作り、LINE スタンプ作り、校内喫茶店開催に向けたポスター作成や調理の練習を行った。

(2) 事前準備

霧が丘高校にて本企画を行うにあたり、事前に高校の担当の先生と適宜メールで連絡を取り、私たちからは企画の目標や活動計画、具体的なワークショップの内容や進行スケジュールを共有、説明を行い、また参加者募集のためのポスターの配布をお願いした。担当の先生からは、企画や大学生への要望を伺った。また企画・日程の相談や選定、高校側で用意可能な備品の準備を必要に応じてしていただいた。

その他の事前準備としては、企画の目標や活動計画、具体的なワークショップの内容や進行スケジュール、参加者募集のための配布用のポスターの作成を行った。加えて、ワークショップに必要な説明用スライドやポスター、調理器具についても事前に入念に準備を行った。

(3) 準備・実施期日

第1回

準備日：2023年5月上旬より

実施日：2023年5月26日

第2回

準備日：2023年6月上旬より

実施日：2023年7月7日

第3回

準備日：2023年9月下旬より

実施日：2023年10月20日

第4回

準備日：2023年11月上旬より

実施日：2023年12月7日

第5回

準備日：2024年2月上旬より

実施日：2024年3月8日

(4) 企画従事者

多久和佳、朝倉舞、小林なな、藤井郷、影山絢菜、高橋明詠、唐澤由佳、高田みのり、小牧颯希、岡崎祐月、坂本篤美、高瀬奏

計12名

(5) 企画内容

①霧が丘高校生徒と大学生の交流イベント

第1回のワークショップでは、連携生と大学生の親睦を深めるため、自己紹介も兼ねて簡単なゲームを行った。「お隣さんを紹介しましょう」ゲームで、他己紹介的な形で、他連携生や大学生にインタビューを行い、それを基に皆に紹介をするものである。連携生の要望を聞いたり、親睦を深めたりして、次回以降のワークショップの計画や準備のために役立てた。

②誰かのためのコップ作り

第2回のワークショップでは、連携生が誰かを助ける、支援する立場となって工夫したコップ作りを行った。連携生自身がどのような人に向けた、どのようなデザインのコップかを工夫して考え、紙コップなどを使って実際にコップを作成した。

③オリジナルLINEスタンプづくり

第3回のワークショップでは、連携生がLINEスタンプの作成を通して自分らしさを表現することを目的に行った。

④校内喫茶店開催に向けたポスター作り

第4回のワークショップでは、来年8月上旬に開催予定のイベントに向けたポスター作りを行った。このイベントとは連携生と大学生の交流に限らず、霧が丘高校の一般生を含めたより大規模の交流を目的に行うものである。また、このイベントの内容については事前に、LINEスタンプ作り(連携生が支援の立場に立つことで、自分に自信を持つことが目標)、霧が丘高校紹介ツアー(連携生がツアーとなることで、自信を持つことや主体的に楽しく他者と関わる機会を設けることが目標)、校内喫茶店(連携生が主体的に楽しく他者と関わることや社会経験としての機会を設けることが目標)の3つの企画案を用意して置き、当日連携生に選んでもらったところ、校内喫茶店に決定した。そのため、喫茶店の宣伝用のポスター作成を行った。

⑤校内喫茶店開催に向けたお菓子作り

第5回のワークショップでは、先述の校内喫茶店開催に向けて、提供予定のホットケーキと白玉の試作を行った。

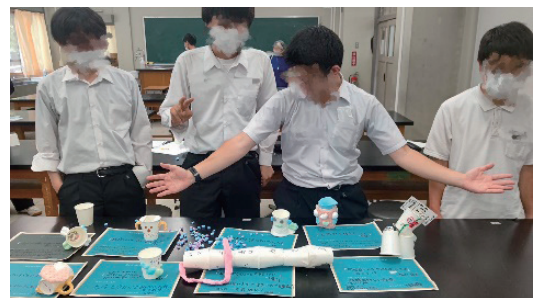


写真1 第2回(2023年7月7日)コップ作り



写真2 第5回(2024年3月8日)白玉試作

3 結果・意義・所見

(1) 活動の結果

本活動の結果として、定期的なワークショップの開催を通じて、連携生にとっての他者と楽しく関わり合ったり、自信を持ったりする機会を作ることができたと考える。

他者と楽しく関わるという点については、2,3ヶ月に一度の開催のワークショップにも拘らず、毎回参加してくれていて、他連携生や大学生との交流を楽しみにしてくれている5,6人の連携生の存在から、その機会を設けることができていると考える。

また、連携生が自分に自信を持つという点に関しても、ある程度成果が見られた。LINE スタンプ作りやお菓子作りのワークショップの際に、連携生に感想を聞いたところ、スタンプ作りでは、「LINE スタンプが意外に簡単に作ることができた。」「他にも作って、実際に使ってみたい。」など、スタンプ作りへの楽しさと意欲が感じられたような回答があった。お菓子作りでは、「皆でとても美味しいものを作ることができた。」など、多くの満足感や達成感を得ることができたという趣旨の感想を連携生から聞くことができ、自信の形成に繋がったのではないかと考える。

加えて、連携生がワークショップでの活動に個性や創造性を活かして参加してくれ

たとも考える。連携生はどのワークショップ・活動においても意欲的に参加してくれていたが、より顕著に個性や創造性を活かして参加してくれていたのが、第2回のコップ作りと第4回のポスター作りである。コップ作りでは、身近な人にとって、使いやすく工夫されたコップの作成を想像力を働かせて作っていた。具体的には、寝たきりの祖父にとって使いやすいような、起き上がらなくても飲み物を飲むことができるコップを考えて作成していて感心した(コップにストローを付ける工夫をしていた)。ポスター作りでは、校内喫茶店というその場で決まったイベントについて、自分の好きなものを書いたり、キャッチコピーを考えたり、それぞれ個性や工夫を凝らした、特徴的かつ素敵なポスターを作ってくれた。

(2) 活動の意義

本活動の意義は、先述の活動の結果の通り、連携生が楽しく他者と関わることや自信を持つ機会になるだけでなく、大学生側にとっても通常の大学生活では経験できないよう経験や知識を得ることができるようにもあると考える。大学生が主体となって連携生との交流・ワークショップを計画し、実施するため企画運営のノウハウや知識、コミュニケーションの方法を実践的に学ぶことが出来ていると考える。また、連携生一人ひとりがその個性や創造性、良さを活かせるよう企画やその方法を考え、準備するため、多様な背景を持つ人たちにとっての理解や共生を目指した交流の方法についても学ぶことができていると考える。

(3) 今後の活動について

次年度のワークショップの開催は、5月と7月を予定しており、先述した8月上旬開催

予定の校内喫茶店イベント本番に向けた、デコレーションの作成(5月)や引き続き提供するお菓子や飲み物の試作、準備(7月)を行う所存であり、本番に向けた計画も既に立っている。連携生の提案を積極的に取

り入れたイベント準備を行うとともに、イベント開催には霧が丘高校及びその連携生や先生方など様々な人たちの協力が必要であるため、迅速かつ入念な計画を行いたい。